

## 小規模校における OJT としてのソフト作成

山田夕子 (愛仁会看護助産専門学校 学生課) [brianboru@ten.zaq.ne.jp](mailto:brianboru@ten.zaq.ne.jp)

### はじめに～「素人」「初心者」「予算ゼロ」

筆者の勤務先は設立 26 年目を迎えた学生数 140 余名、事務職員数 3 名 (含非常勤) の小規模な専門学校である。

校務用コンピュータの利用環境においては、家庭向け仕様のものが設置され、システムの管理担当者も設立当初より置かれていない等十分ではない。

そのような環境下、職員のトレーニングを行い、校務の一つである学籍番号の付与、学生証の発行業務について見直し、再評価を行ったので報告する。

なお、本事例は先に述べたような環境のもとでいきなりトレーニングを担当することになった「素人」が「初心者」に向けて「予算ゼロ」の中で何を試みたかという視点でとらえていただければ幸いである。

### 1. 開始地点

#### (1) スタート地点

ソフト作成を開始した時点ではコンピュータの導入状況は現在と同様であるが、アプリケーションの利用状況には表計算、文書入力程度にとどまっていた。

一方、学生証の発行業務は、全工程が手作業であり、再発行のたびに写真の提出を学生に求める等の不便があったため、コンピュータでの処理を目指していたが、予算の都合上、既成のソフトの導入は見送りが続いていた。

#### (2) 苦手意識とメリット

職員は、全員が独学で PC の操作を習得しており、知識も各自の業務分掌によって偏っていた。特にデータベースについては、使用する機会が少ないだけでなく、トレーニーの職員からは入力フォームの操作時点で「訳がわからない」との発言がきかれる状態であり、表計算との違いの把握も不十分であった。

そこで、小規模校であり、学籍管理に必要な情報の量が写真を含めても CD 1 枚にも満たないことを逆にとり、市販のアプリケーションを利用して学生証他の発行ソフトを実際に作成し、データベースについての導入トレーニングを行うことにした。

なお、導入対象をデータベースとしたのは、既に稼働している他のシステムの操作にもデータベースの知識が必要とされ、苦手意識が職員の業務範囲の拡大の妨げになると考えられたからである。

しかし、先の発言のような状況であるため、まず他のファイルと内容の関連を持たせ、データベースに対するイメージを変えることが必要であった。

### 2. 方法と作成例

#### (1) 節約

苦手意識克服のもうひとつの方法として、現状で単価の算出、目標する単価の設定 (表 2) を行い、経費の削減というハードルを設け、トレーニーに用紙、ラミネートフィル

ム等の選定を一任した。なお、結果として現在はジェットプリンター用の名刺用紙を利用している。

表2 学生証の発行単価

	導入前	目標値
単価(年平均)	¥41	¥20

## (2) 見かけが大事

続いて記載項目を決定し、実際の入力を行ったが、具体的には入力フォームを作成せず、テーブルに直接入力し、表計算ソフトに近い感覚でデータテーブルを作成し、クエリの実行までを先に行った。

続いて、入力フォームを作成したが、これについては画面上の配置をトレーニーが決め、各項目の設定とボタンの機能の設定をトレーナーが行うにとどまり、設定方法を習得するには到らなかった。

なお、下図は現在実際に使用している入力フォームであり、他のメニューも追加されている。

図 現在の入力フォーム

※ 写真は校内でデジタルカメラにて撮影

フォーム作成後は、フォーム上に操作方法を表示することで日々の疑問点の解決を図り、また、Microsoft Word で作成したマニュアルを入力画面からも参照できるようにした。翌年度以降は、実際の入力はフォームからのみとし、トレーニーが画面上のマニュアルを参照しながら行った。

## (4) その後

学生証作成用ソフトの作成を始めてから、現在まで、コンピュータの導入環境に変化はなく、時間が経過した分、悪化している。

しかし、対象となった職員は、データベースへの入力はほぼ独力で可能となっており、現在は証明書発行機能の追加に取り組みつつ、学籍情報全体の管理を目指している。

また、現在の学生証単価は下記のとおりであり、コスト削減も達成できた。

表3 学生証の発行単価(平成17年度)

	導入前	導入後
単価(年平均)	¥41	¥16

## 3. まとめ

コンピュータの活用は最新の機器とソフト、情報とともにあるべきか？

小規模な施設においては時として新しい機器やソフトの導入は予算上も非常に制約されるところであり、コンピュータに携わる職員の教育機会も十分とはいえない。そのため、コンピュータの使い方に職員間で偏りができ、強い苦手意識と結びつくことがある。

しかし、施設が小規模であることは、各自の手中に収まるものを活用するにはむしろ有効である。たとえハードウェア、ソフトウェア両方が不十分であっても、その中で職員がコンピュータの導入拡大、利用方法の変化に対応できるよう意識付けを行うことは決して不可能ではない。

今回の報告はコンピュータ導入環境の最底辺ともいえるところからであるが、それゆえの取り組みを今後とも続けていく所存である。

最後になったが、今回のトレーニーM.N氏に感謝する。